

(1日本史プリント4-3)

3, 幕府の衰退と庶民の台頭 a, 農業・商工業の発達 (2)

③定期市の間隔の減少(三斎市から[1 六斎市]へ)

常設店([2 見世棚])の増加、特定の商品を扱う市場の成立

行商人([3 連雀]商人、[4 振売], 大原女、桂女)などの増加→女性の活躍

④[5 座]の増加、全国化=公家・寺社の保護下に販売・製造の特権を得る

拡大、しだいに営業税を払うだけの関係となっていく→全国化

座=6 商工業者の組合。朝廷や寺社を本所とし営業上の特権を与えられた。

←→15世紀以降、新興商人の増加、対立の激化

⑥貨幣経済の進展……永楽通宝など[7 明銭]・宋銭(←日明貿易)の使用

粗悪な私鑄銭の使用→[8 撰銭]の実施=商品流通の障害となる

→大名ら[9 撰銭令]を出す

年貢の銭納の一般化、支払い手段の簡略化=[10 為替]の利用の増加

⑦金融業者=[11 土倉], 酒屋、僧院など←幕府は[12 税]と引換に保護・統制

(倉役・酒屋役)

⑧交通の発達→回船の往来、交通の要衝への問屋

運輸業者=[13 馬借], [14 車借]の活躍→一揆のきっかけとなることも

b, 農業の発展、惣村の形成と土一揆

①農業生産力の向上=[15 集約]化,[16 多角]化の方向へ

↓

[17 灌漑]や排水施設の整備・改善,[18肥料]の使用(刈敷・草木灰・[19下肥])

=地味向上・収穫安定化

[20二毛作]の全国化(畿内では[21三毛作]), 米の品種改良(自然条件に適した作柄に)

[22手工業原料](桑・楮・漆・藍・茶など)の栽培の活発化

→農村加工業の発達=絹織物(加賀・丹後)、和紙(美濃・播磨)

②農民の生活向上=名主の[23地主]化、作人の[24名主]化、[25下人]の独立などがすすむ。

↓

③[26小百姓]をも構成員([27惣百姓])とする自立的・自治的共同体=([28 惣])(惣村)が成立

④役割

・村の神社の祭礼への参加([29 宮座]), [30農業]での共同作業、戦乱への自衛など

・[31灌漑用水]の管理(「水の管理」)、共同利用地([32入会地])の確保

・惣請([33 百姓請])= [34 年貢]を惣村で請負う

⑤惣村の指導者=[35 年寄], 乙名、沙汰人などと呼ばれる。

→彼らの多くは、[36 武士]としての性格と農民としての性格をあわせもつ[37 地侍]。

⑥惣村の運営=[38 寄合]という村民の会議で決定

→[39 惣掟]というきまりをつくり、警察権も行使する([40 自検断])

↓

⑦領主にたいするたたかい=不法な代官の免官や年貢減免などをもとめ、一揆を結び領主に要求

・領主のもとに大量に押し掛ける([41 強訴])

・全員が耕作を放棄し他領や山林に逃げ込む([42 逃散])

⑧惣村を越えた結合=[43 惣郷]の形成←用水の管理など

→土一揆の基盤となる

⑨土一揆の展開

1)1428[44 正長]の徳政一揆…近江の[45 馬借]の蜂起をきっかけに京都近郊の農民が[46 徳政]を要求し酒屋、土倉をおそい、売買関係の書類を破棄。→徳政令はでない!

↓

畿内を中心に各地で徳政一揆が勃発、実力での債務破棄・売却地の取戻し([47 私徳政])実施

3)1441[48 嘉吉]の土一揆…「代替わりの徳政」を要求→徳政令を出す

以後、土一揆の発生→幕府、徳政令を乱発=[49 分一銭]を財源として利用

鎌倉後期、近畿地方やその周辺部では、支配単位である荘園や郷(公領)の内部にいくつかの村が自然発生的に生まれた。農民たちがみずからつくり出したこの自立的・自治的な村を[50惣村]という。こうした村においては、古くからの有力農民であった名主層に加え、新しく成長してきた[51 小農民]も構成員とし、[52 宮座]とよばれる村の神社の祭礼への参加、農業の共同作業、戦乱に対する自衛などを通して、しだいに村民の結合を強くしていった。このような村を構成する村民を[53 惣百姓]ともいった。

惣村は[54 寄合]という村民の会議の決定に従って、[55 年寄]・乙名・沙汰人などよばれる村の指導者によって運営された。村民はみずからが守るべき規約である[56 惣掟]を定めたり、村民自身が警察権を行使すること([57 自検断])もあった。さらに、農業生産に必要な山や野原などの共同利用地([58 入会地])を確保、[59 灌漑用水]の管理もおこなうようになった。領主へおさめる年貢などをひとまとめにして請け負う[60 地下請]も広がった。

強い連帯意識で結ばれた惣村の農民は、不法を働く荘官の免職や、水害・干害の際の年貢の減免を求めて、荘園領主のもとに大挙しておしかけたり([61 強訴]), 全員が耕作を放棄して他領や山林に逃げ込んだり([62 逃散])する実行使をししばしばおこなった。

また惣村の有力者のなかには、守護などと主従関係を結んで武士化するものが多くあらわれた。このように、農民として荘園領主や地頭に年貢などをおさめながら、守護などと主従関係を結んで侍身分を獲得したものを[63 地侍]という。

これらの惣村は、時には荘園・郷の枠を越えて、領主を異にする周辺の惣村と連合することもあった。このような共同行動をとる場合、惣村が支配単位である荘園や郷を中心にまとまった、より大きな強い結合体である[64 惣郷]などが結成されることが多かった。

そして、このような連合した農民勢力が、大きな力となって中央の政界に衝撃をあたえたのが、1428年の[65 正長の徳政一揆](土一揆)である。惣村の結合をもとにした土一揆は[66 徳政]を要求し、京都の土倉・酒屋などをおそって、質物や売買・貸借証文をうばった。徳政一揆はたちまち近畿地方やその周辺に広がり、各地で実力による債務破棄・売却地の取戻し([67 私徳政])が展開された。

1441年、将軍が殺害された事件をきっかけに数万人の農民たちが京都を占拠した[68 嘉吉の土一揆]が発生、幕府はついには土一揆の要求を入れて徳政令を發布した。この後も土一揆はしばしば徳政をもとめて各地で蜂起した。